

## 『犬と猫の治療ガイド 3 号救急』

### 訂正とお詫び

掲載記事中、以下の記述に誤りがございました。ここに訂正させていただくとともに読者の皆様および関係者の方々に深くお詫び申し上げます。

株式会社 EDUWARD Press

2025 年 10 月 20 日作成

| 頁      | 記事タイトル    | 該当箇所                   | 誤                            | 正  |
|--------|-----------|------------------------|------------------------------|--|
| p. 322 | 副腎皮質機能低下症 | 処方例（酢酸フルドコロチゾン〔フロリネフ〕） | 初期用量：<br>0.05～0.10 mg/kg BID | 初期用量：<br>0.05～0.10 mg/頭 BID<br><br>※1 著者よりコメントあり<br>(下記参照) |

#### ※1 著者よりコメント

Canine and Feline Endocrinology 4th Edition (Feldman EC ら、Elsevier, 2015)によれば「猫アジソンの長期治療において、フルドコロチゾンの投与量は犬と違いなく考える」「投与量は 0.05～0.10 mg BID」といった内容が記載されています（516 p）。また、犬の投与開始用量においては「0.02 mg/kg 1 日 1 回、または 2 回に分けてこれを与える」といった旨が記載されています（510p Table 12-6）。猫で 0.05～0.10 mg/kg BID とした本書の誤表記は、明らかに過剰で、体重によりますが想定約 2～4 倍量を投与することになり、重大な間違いです。お詫びして訂正いたします。

他には、犬において臨床徴候のコントロールに必要なフルドコロチゾンの用量は、副腎皮質機能低下症の犬 190 頭を対象とした研究があり、0.01～0.08 mg/kg/日の範囲で、必要な用量は時間とともに増加していった、とする報告があります（Kintzer and Peterson, 1997）。

また、フロリネフのインタビューフォームには、犬を用いた毒性試験の記載があり、「フルドコロチゾンの犬における筋肉内投与 26 週間慢性毒性試験（0.187、0.375、0.75mg/kg）では、著しい利尿と摂水量の増加、副腎萎縮、腎障害、好酸球数及びリンパ球数減少、好中球数増加、骨格筋のナトリウム増加、骨格筋のカリウム減少、骨格筋の萎縮と脂肪増加、皮下及び腹腔内脂肪の多量沈着、血中尿素窒素の減少、血清蛋白と尿中ナトリウムの増加が認められた。以上の所見は休薬により回復、もしくは回復傾向がみられた」とのことです。

猫における研究は少ないため、猫の毒性量がどのくらいかははっきり申し上げにくいですが、以上をもとにすると本書で記載された誤表記の最大用量 0.1 mg/kg BID を開始用量として用いることはそれなりの危険が伴うと考えられます。ただ、内分泌疾患におけるステロイド製剤の最適用量は個体によって異なることから、実際の症例への投与用量については、上記を踏まえて個別にご検討いただきますと幸いです。何卒宜しくお願い致します。